



やっと出せました…

はじめに

いよいよ、待ちに待った夏休みが始まりました。梅雨も明け、まさに、夏真っ盛りです。といっても、個人懇談や水泳教室など、まだまだ行事が続きます。月末には、指導案の〆切がやってきます。大会当日に配付する各会場校の研究紀要は、これまで、先生方が積み上げてこられたものを、研修部にて編集しています。先生方は、当日の指導にのみ力を注いでいただければと思います。詳細は、追ってお出しします。

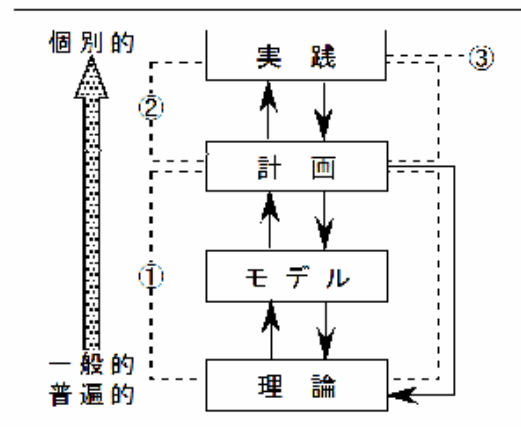
さて、今回は、先月来ずっと懸案になっていた「協働する授業研究」についてお話ししたいと思います。先日、教育センターの「小学校社会科授業づくり研修」に参加して、広島大学大学院 草原和博先生の講話を聞きました。草原先生は、私が大学院時代の二つ上の先輩で、有森先生とは同期という近い存在の先生です。「M字大作戦」と題して、子どもの認識を揺さぶったり、ひっくり返したりしたところから問いを持たせ、認識を高める授業論を提唱されています。これについては、昨年度、「徒然なるままに」14号にてお話させていただいています。(ホームページにもあげていただきました！)

今回は、校内・外で行われている授業研究・協議会が授業改善につながりにくい、深まりのないものになっていることを指摘された上で、教職員みんなが「協働」する授業研究について話をされました。そこで、「協働」する授業研究にするための授業分析について一考したことをお話ししたいと思います。

1 授業研究の四つのプロセス

授業研究を進めるプロセスとして、次の4段階が考えられます。

1段階目は、「理論」です。学習指導要領と教材を照らし合わせて、どのようなことをねらい(目標)、どのような社会(仕組・人々の姿)を(内容)、どのように(方法)学ばせるのかというように、目標-内容-方法を位置付け、それらを有機的につないで、授業の原理や仕組み(これが「授業論」です。)を考える段階です。社会科の場合は、この教材を取り上げると、どんな社会(仕組・人々の姿)を引き出すことができ、どんなことを



〈資料1：授業研究のプロセス〉

ねらうことができるかを考えることが多いかもしれません。そのため、いつもお話するように、授業論の基になる論理は、教材・内容の構造に基づく論理となるでしょう。

2段階目は、「モデル」です。「理論」に基づいて、具体的に教材を選定し、単元計画

から本時案までを具体例として構想する段階です。教科書の指導書に示されている授業案は、このレベルかもしれません。

ちなみに、授業モデルを、授業の形式や過程を、模式的に表現したものをいう場合があります。例えば、本校の「学び合いシート」は、本校の授業論を指導案の中に形式化した「授業モデル」と言えるでしょう。

3段階目は、「計画」です。教材の構造や子どもの思考の流れに基づいて、具体的な学習活動を考え、学習指導計画を立てたり、発問や資料提示などを細かく考えて本時案を立てたりする段階です。まさに、実際の授業づくり・指導案づくりの段階です。

4段階目は、「実践」です。本時に行う授業そのものであり、計画していた発問や学習活動を実際実験する研究的な授業です。

これを図示すると、前頁の〈資料1〉のようになります。この4段階について、次の3点が指摘できるでしょう。

1点目は、授業には、根底に理論が必要なことです。教材や子どもの実態などを分析し、明確な目標を持ち、それに見合う内容と方法を設定する意図的で、論理的整合性のある授業づくりが必要だということです。

2点目は、他の教材や切り口に適応できたり、他のねらいに転化できたりする上で一般的・普遍的なレベルの「理論」から、段階を経るごとに、個別で具体的なレベルへと集約されていくことです。

3点目は、この一連の流れは、一方通行ではなく、双方向に進み続けることです。「実践」の有効性について検討するために、「計画」の段階での授業の仕掛けや「理論」の段階での目標・内容・方法の設定を検討したり、「計画」の段階で、この授業が成立するかを「理論」の段階から見直したりするというように、授業を分析することが考えられます。

2 着目点による授業分析の分類

どこに着目し、どのレベルで授業分析するかによって、四つに分類することができると考えられます。

一つ目は、実践的分析です。(草原先生は、「外在的な批判に基づく改善」とされました。)これは、授業者が設定した目標を達成する上での内容や方法の課題を指摘する分析です。実践することを前提として、子どもの発達段階、実態、思考の仕方、時間設定など、授業という一定の条件の中でより効果的な授業展開を検討することです。具体的には、子どもが主体的に学習するための発問や資料提示の仕方、より目標達成に有効な学習活動などに着目した分析となるでしょう。授業研究の4段階に位置付けると、〈資料1〉の「[]」①となります。

二つ目は、授業論的分析です。(草原先生は、「内在的な批判に基づく改善」とされました。)これは、授業者が設定した目標自体の理論としての課題を指摘する分析です。教材の構造と学習指導計画・本時案を一旦理論化し、授業者が掲げた目標で指導した場合の課題を指摘した上で、より意義が見込まれる目標-内容-方法を検討することです。言い換えれば、授業の根底に流れる理論の整合性や教材分析から見出されたその授業のねらいや教えたい内容の適性に着目した、授業の合理性の分析となるでしょう。授業研

究の4段階に位置付けると、〈資料1〉の「[]」②となります。

三つ目は、子どもの学びから見る分析です。「実践」の段階での子どもの学びとその原因の分析です。子どもの発言や文章表記をつぶさに拾い上げて思考の動きや認識の変容を見つけ、その原因となる学習活動の仕方や発問、資料提示といった教師の手立てとを関連させることを通して、子どもの学びを生み出す授業の原理や手法について検討することです。ここで重要になるのは、授業者が子どもの思考を促したり、学び合ったりする手立てを意図的に講じた上で分析することと、子どもの思考・認識を的確に見とることです。そうしないと、授業の手立てが偶然と思いつきに頼ることになり、一般性・普遍性のある理論にならないからです。授業研究の4段階に位置付けると、〈資料1〉の---- ③となります。

四つ目は、三つの観点による授業を分析です。これは、以前から授業を見合う話の中で、何度もお話したことです。まず、「記述」は、ねらい・内容・教材・方法といった授業構成に着目して、この授業の特徴・よさを指摘することです。次に、「説明」は、ねらい・内容・教材・方法の一連のつながりといった授業論に着目して、このような授業になる原因、このよさが出る仕組みを指摘することです。さらに、「判断」は、この授業をよりよくするための改善策を提案することです。

③ 「協働」的な授業研究を進めるために

草原先生は、「協働」する授業研究によって、「同僚性を基盤とした専門性の向上を目指すこと」が必要だとされました。では、2で挙げた授業分析を踏まえて、どうすれば、「協働」する授業研究にすることができるのでしょうか。次の2点が挙げられるでしょう。

1点目は、内在的な批判に基づく授業改善、2でいう理論的分析です。子どものために授業をするのですから、授業することを前提とした実践的分析は、もちろん必要です。しかし、実践にのみ重きを置いた分析は、参観者の思い付きや独自の手法を根拠にし、授業技術のレベルでの検討の域を越えません。これでは、授業づくりの仕方、原理にまで立ち入った分析をすることができないために、授業改善になりにくいと考えられます。したがって、教材・内容の論理と目標-内容-方法のつながりから授業論を明らかにし、その整合性から、授業を分析、批判することが必要だと考えられます。そこで改善された理論は、一般性・普遍性を持っているため、他の授業に転用・応用することができると考えられます。

このことを切り口を換えて述べてみると、まさに、「内在的な批判」の必要性を示しています。事前研や協議会などでは、とかく、授業をどう流すかという単元・本時の展開について話題にされます。これは、恐らく、授業者の意図に沿って授業として成立させようという参会者の思いからそうなるのでしょう。しかし、授業の方向性であり、本質となる授業論から根本的に分析、批判されなければ、授業そのものの改善、ひいては、子どもの学びの向上にはつながらないと考えられるのです。

2点目は、批判的な分析です。子どもが発言する際と同じように、私たち教師も、他の授業者の授業を批判することに抵抗を感じてしまう傾向にあります。そのため、上でも述べたように、授業者の意図に沿い、単に授業が流れるように、いろいろなアイデアを

出し合ったり、授業後に、決まり切った言葉で褒め合ったりするだけの検討に陥ることがあります。しかし、これでは、お互いの授業力向上にはつながりません。「同僚性」とは、同僚とのつながりの中で、率直に考えを伝え合い、互いの授業改善に寄与することのできる条件だと思います。その条件の下、より合理的で、より子どもの学びに有効な授業にするために、授業論と子どもの思考の論理に着目して、批判的に分析、検討する能力とそれが成立する風土が必要なのではないのでしょうか。これが「同僚性を基にした専門性の向上」につながると考えることができるでしょう。

おわりに：

今回は、もったいぶったわりに、もしかすると、実感の湧きにくい、分かりにくい内容になってしまったかもしれません。先般もお話したように、今年度の研修会は、発言が少ないために、深まりのある協議になりにくくなっていると感じます。全国大会が迫ってきた今こそ、教師集団全体で授業づくりに参画し、みんなで授業づくりをする空気をつくっていくことが必要だと思います。

授業分析力は、授業力の中の大切な要素の一つです。私が皆さんに授業を見合うようにとお願いするわけの一つは、ここに 있습니다。互いに授業改善を目指して、協働的な授業研究を進めてみましょう。研修部もできる限り取り組みますので、よろしくお願いいたします。